

vivo

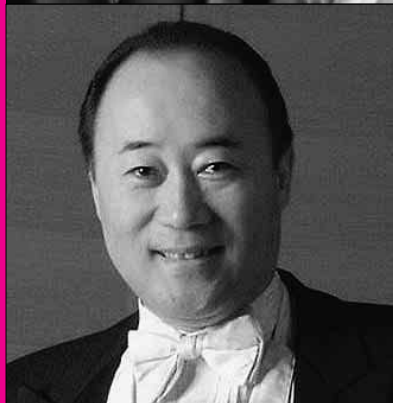
水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ]

2&3

FEBRUARY / MARCH
2007

CONTENTS

レイフ・オヴェ・アンズネス ピアノ・リサイタル	1
ヴェッセリーナ・カサロヴァ メゾ・ソプラノ・リサイタル	2, 3
ちょっとお昼にクラシック 6	3
ジグモンド・サットマリー オルガン・リサイタル	4
合唱セミナー 2007 講師:林 光	5
SELF PORTRAIT 中村真由美・中村佳代、後藤晴美	5, 6
最近の公演から	6, 7
プチ情報	7
インフォメーション	8



写真上・左:ヴェッセリーナ・カサロヴァ 上・右:レイフ・オヴェ・アンズネス
下・左:工藤重典(ちょっとお昼にクラシック 6) 下・右:ジグモンド・サットマリー

来日直前、アンズネス・インタビュー。曲目追加情報も！

2 / 4(日)レイフ・オヴェ・アンズネスピアノ・リサイタル

いよいよ目前に迫ってまいりましたレイフ・オヴェ・アンズネスのピアノ・リサイタル。vivoでは最近入ってきた曲目追加情報と、来日直前のアンズネスのインタビューをお届けします。

まず、曲目追加情報から。事前のご案内では、グリーグ ノルウェー民謡による変奏曲形式のバラード短調 作品24、ベートーヴェン ピアノ・ソナタ 第32番 八短調 作品111、ムソルグスキー 展覧会の絵 の3曲とお伝えしてきましたが、グリーグとベートーヴェンの間に、シューマン 4つの小品 作品32 が追加されることになりました。後に掲載のインタビューをご覧になればお分かりのように、あまり演奏されることのないこの作品にアンズネスは熱い思いを寄せています。

シューマンの 4つの小品 作品32 には、“ジーク”や“フゲッテ”といった曲が含まれています。変奏曲形式で書かれたグリーグ作品とこのシューマンを前に置き、歴史を逆にたどるようにベートーヴェンの最後のソナタ(深遠な変奏曲とフーガを内包する作品です)に迫っていく そんなアンズネスのアプローチが見て取れるかも知れません。

それでは来日直前のアンズネスのインタビューをお読みになって、リサイタルを楽しみにお待ちください!

《関根》

アンズネス来日直前インタビュー

今回のプログラムについて

今回は4つの全く異なった、それでいて私にとってとても大切な作品を演奏する予定です。まずグリーグのバラードですが、グリーグ作品の中では最も重要なピアノ独奏のための作品であるにも関わらず、なぜかほとんどノルウェー以外の場所で演奏されることがないため、あえて取り上げました。

最近になって追加したシューマンの4曲については、素晴らしい曲にもかかわらず演奏されることが極めて稀なので、私としては声を大にして擁護したいのです。クライスレリアーナをはじめ、シューマンのその他の人気のピアノ曲にも匹敵する美しさと力強さをたたえた曲だと思っています。部分的にバロック様式が取り入れられていますが、これはシューマンのバッハへの偏愛ぶりが反映されています。2曲目はジーク(バロック舞踏)で、最後の曲はフゲッテになっており、その間にはさまざまな曲は嵐のような苦悩のロマンツァです。

ベートーヴェンの最後のピアノ・ソナタ、作品111は、私にとって音楽の魔法の究極の姿です。エモーショナルであると同時にエニグマに満ちており、しばしばとらえがたい何かを顔を出します。ドラマティックな冒頭から、終わりにかけては天国的で、大きな対比がみられます。大きなスケールでの内面の旅と言ってもいいでしょう。

ムソルグスキーの 展覧会の絵 ですが、またまた大きなコントラストに満ちた作品で、私が思いつく限り、あらゆるピアノ曲の中でも最も演劇的要素の大きい作品かもしれません。この作品は、独創性の面でも、純粋な音響としても、圧倒的というほかありません。

没後100年、グリーグ・イヤーについて

グリーグ(1843~1907)は私が子供の頃から演奏してきた作曲家です。グリーグ作品には、テクニク的にそれほど難しくはない、とても魅力的な小品が多いからです。

彼の作品は、ショパンやシューベルトと同じように、人の心に直接訴えかけるものを持っています。実はこの3、4年ほどあまりグリーグを演奏していなかったのですが、2007年の作曲家の没後100年には、作品24のバラードに初挑戦します。

このバラードはグリーグ自身が、個人的に大切にしていた1曲で、その生涯の中での危機に直面していた時期に書かれたものです。作曲直前に両親が亡くなり、結婚生活に問題が生じていた時期でした。そのためか、この作品の中に少なからぬ悲しみと怒りが感じとれます。そして同時に、作曲家としての作曲上の悩みも抱えていました。バラードというタイトルであるにもかかわらず、実際にはメランコリックな山岳地方の民謡を素材とした変奏曲と言えるでしょう。

(インタビュー:ジャパン・アーツ)

ヴェッセリーナ・カサロヴァ



カサロヴァの歌で、最高の心の贅沢をあなたに 2 / 14(水)ヴェッセリーナ・カサロヴァ メゾ・ソプラノ・リサイタル

投資すべきリサイタル

筆者が学生の頃、ある人から「ジェシー・ノーマンのリサイタルは10万円払ってでも生で聴くべきだ。そういう類の芸術だ」と聞かされたことがあります。そのときは「へえ」と思うだけでしたが、実際にお金をためてリサイタルに足を運んで納得。ノーマンの歌には、聴く人の人生を変えてしまうほどのパワーがあり、CDやビデオなどの記録媒体にはとうてい収まりきらないオーラ、もしくは霊的な何かがあったのです。

昨年3月に来日したメゾ・ソプラノ歌手、チェチーリア・バルトリにも同様の価値を感じました。バルトリは、まさに生きる歌唱芸術。ベルカント華やかかりし19世紀イタリア、ロッシェニ、ドニゼッティ、ベッリーニたちが競って書いたベルカント・オペラの世界に、私たち聴衆をいとも簡単に連れて行ってくれるのです。それは本当に夢のような体験でした。

前置きが長くなりましたが、このたび来水するメゾ・ソプラノ、ヴェッセリーナ・カサロヴァ。彼女も、絶対に聴いておかなければならない歌手の一人と断言できます。全身から溢れ出る歌う喜びと美しい響き。トランペットのような輝かしい歌声から、消え入るようなソット・ヴォーチェまで自在に操る確かなテクニック。そして、プリマの証とも言える華のある存在感。これらすべてが、彼女が歌うオペラの登場人物の心の叫びと結びついて、迫真の表現となって聴き手に押し寄せます。その舞台での立ち振る舞いにも、独特の雰囲気があって、一瞬にして観る者の心を奪う力があります。カサロヴァはまさに歌う女優なのです。

音楽情報誌「モーストリー・クラシック」に、「音楽生活 投資委員会」というコーナーがあるのをご存知でしょうか。供給過多とも思える東京のクラシック演奏会の中から毎月どれを選べばよいのか、目利きの評者たちが案内するコーナーです。2月号では、4人の評者のうち3人(石戸谷結子氏、菊島大氏、山本益博氏)が、「2月の投資銘柄」の三ツ星(1位)にカサロヴァの東京公演を挙げています。やはり、カサロヴァのリサイタルは、「投資すべき」公演なのですね。

ブルガリア出身の稀代の歌姫

ヴェッセリーナ・カサロヴァは、1965年7月18日、ブルガリア中部のスタラ・ザゴラに生まれまし

た。4歳からピアノをはじめ、ピアニストを志していましたが、18歳の時、自らの歌の才能に気づき、声楽に転向しました。ソフィア音楽院在学中からしばしばソフィア国立歌劇場に出演、卒業後はただちにチューリヒ歌劇場と契約。その直後には、名指揮者ヘルベルト・フォン・カラヤンのオーディションを受け、パッハ 口短調ミサ のソリストに内定していたそうです。ところが、その公演が実現する前にカラヤンは亡くなってしまいました。

「カラヤンが認めてくれたというだけでとても嬉しい。それはとても幸運なことだったと思います。キャリアを積み上げるには実力だけでなく、運というものも必要です。私はそうしたチャンスに恵まれたことを感謝しています」

澄み切った音楽を聴かせた晩年のカラヤンと若き日のカサロヴァの共演、それもパッハの 口短調ミサ となれば心の底から聴いてみたかったと思いますが、残念としか言いようがありません・・・。

さて、カサロヴァは、チューリヒでさらに研鑽を積み、瞬間にこの名門歌劇場の中心的存在となります。また、1991年にはザルツブルク音楽祭にモーツァルト 皇帝ティートの慈悲(アンニオ役)でデビュー、続いてウィーン国立歌劇場にロッシェニ セビリヤの理髪師(ロジーナ役)でデビューします。

その後は目覚ましい活躍ぶり! チューリヒ歌劇場を本拠に、ウィーン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場、パリ・オペラ座、コヴェント・ガーデン王立歌劇場、ボローニャ歌劇場、メトロポリタン歌劇場といった世界の名だたるオペラ・ハウスにつぎつぎに客演。共演した指揮者は、ニコラウス・アーノンクール、小澤征爾、コリン・デイヴィス、セムヨン・ピシュコフ、ダニエル・バレンボイム、ピнкаス・スタインバーグ、リカルド・ムーティ・・・と一流揃い。主に、モーツァルトやロッシェニのオペラの主要な役を歌い、本場ヨーロッパの聴衆、批評家から当代屈指のメゾ・ソプラノ歌手として称賛されました。

また、カサロヴァのCDは専属であるRCAレーベルからコンスタントに発売されています。「フランス歌曲を歌う」、「モーツァルト:オペラ・アリア集」、「ロッシェニ:アリア&デュエット集」、ブルガリア民謡を集めた「ブルガリアの心」のほか、ロッシェニ タンクレディ、マスネ ウェルテル、ベッリーニ カブレーティとモンテッキ、ウェーバー

オペロン など、オペラ全曲盤も次々にリリース。昨年は待望のモーツァルト 皇帝ティートの慈悲(カサロヴァはもちろんセスト役が発売されました。カサロヴァのこの破竹の勢いは、もはや誰にも止められないでしょう。

水戸芸術館スペシャル

2004年以来、3年ぶりの単身の来日ツアーとなる今回ですが、日本での公演回数は4回のみ、しかも開催地は東京、大阪、水戸だけです。

東京公演(2/8と2/11)はサントリーホール、大阪公演(2/17)はザ・シンフォニーホールで行われます。いずれも2000席規模の大ホールです。カサロヴァ・クラスのオペラ歌手になると、世界のどこに行っても大劇場、大ホールが当たり前。ですが、水戸芸術館としてはそこに「待った」をかけたかったのです。

カサロヴァは、たしかに、鋭い響きと豊かな音量でどんなに大きいホールでもねじ伏せてしまうだけの力量を持っています。しかし、カサロヴァの真の凄さは、そのダイナミックな強声と、その対のように存在する繊細で細やかな心理描写を歌うソット・ヴォーチェ(弱声)との間の、表現の振幅の大きさにあると思うのです。単なるダイナミック・レンジの広さではありません。そこに、彼女が歌うオペラの登場人物の全人格が反映されているとでも言うべき、表現の振幅の大きさなのです。そのカサロヴァの歌唱芸術の真髄を味わうには、歌手の細やかな表情や息遣いまではっきりと聴き取れる水戸芸術館コンサートホールATMの親密な空間こそベストではないでしょうか。

そもそもカサロヴァの日本ツアーは、オーケストラ伴奏による大ホールでのリサイタルのみが想定されていたようですが、「室内楽ホールで、ピアノ伴奏で」という私たちからの要請に快く耳を傾けてくれたカサロヴァ。ピアノは、カサロヴァが厚い信頼をおく指揮者デイヴィッド・サイラスが担当。おそらく世界のどこに行ってもお目にかかれないうであろう贅沢な一夜が、ここ水戸芸術館で実現します。(注:最終的には大阪公演もピアノ伴奏でのリサイタルに決まったとのことです。)

水戸芸術館スペシャル

水戸芸術館でのリサイタルは、プログラムもまたスペシャル!「初めて接するお客様も多いと思うの



写真左から;工藤重典、荒 絵理子、伊藤 圭、成田有花

で、カサロヴァさんの魅力をぎゅっと凝縮したプログラムで」とリクエストを出したところ、「こんなに歌っていただいているの!？」と嬉しい驚きのプログラムの返事が返ってきました。オペラ歌手としてのカサロヴァのリサイタルであれば、「これは聴きたい」と思っていた曲目がすべて入っているといっても良い、超贅沢なプログラムと申せましょう。

まず、第1部、カサロヴァ自身「自分にとって極めて重要なレパートリー」と話すバロック・オペラから2曲(グルック:歌劇 オルフェオとエウリディーチェ より「エウリディーチェを失って」、ヘンデル:歌劇 アルチーナ より「やさしい愛が私を誘う」)。次は、モーツァルト:歌劇 皇帝ティートの慈悲 より「わたしは行くが、君は平和で」。カサロヴァ「私は、ある種の劇的要素を秘めた悲劇的で思慮深い役が好きです。(このアリアを歌う)セストは、根底にある深い悲しみと、精神的な力強さの両方を持ち合わせていることで、私を魅了します」。第1部最後は、ロッシーニ:歌劇 タンクレディよ

り「おお祖国よ、この胸の高鳴りに...大いなる不安と苦しみの中で」と「何故こうも心の平静がかき乱されるのだ」の2曲。タンクレディ は、1992年のザルツブルク音楽祭でマリリン・ホーンの代役として急遽出演し大成功を収めた、カサロヴァにとって思い出深いオペラだそうです。

第2部は、カサロヴァが近年次々と手中におさめているフランス・オペラのアリアから。まず、トーマ:歌劇 ミニョン より「オレンジの花咲く国を知って?」「君よ知るや南の国」。次に、ピゼー:歌劇 カルメン より「恋は野の鳥」「ハバナラ」と「響きも鋭く」「ジブシーの歌」。「私は、高音域から低音域までである作品が自分の声にいいと思っていますが、カルメン は中音域がすごく多いんですよ...」と以前躊躇していた カルメン に満を持して挑戦。聴き応えがありそうです。最後は得意のロッシーニで。ロッシーニ:歌劇 アルジェのイタリア女 より「愛する彼のために」と歌劇 セビリヤの理髪師 より「今の歌声は」。ロッシ

ーニはコロラトゥーラをこぞどという決定的なシーンで繰り出すのです。ある運命的なシーンでコロラトゥーラによって主人公の強い意志を表現し、同時に彼女(彼)の性格が明らかにされるのです。苦い、よるこばしい、悪意に満ちた、ロマンティックな、といった様々な感情、イライラする焦燥感なども、そのときのドラマの状況に応じてコロラトゥーラの楽句で表しています。

最後にスペシャルがもう一つ。水戸芸術館でのリサイタルの日は、ヴァレンタイン・デーと重なっています。カサロヴァの歌は、この大切な日の忘れられぬ美しい思い出となることでしょう。皆様のご来場を心からお待ちしております。

文中のカサロヴァの発言は、「音楽の友」2000年12月号、2002年5月号、「レコード芸術」2004年7月号、CD「マジック・オブ・カサロヴァ」ライナーノートから引用させていただきました。

《関根》

工藤重典と若手奏者たちが、華麗な「お昼」を演出します。

2 / 16(金)ちょっとお昼にクラシック6 魅惑の木管アンサンブル

「ちょっとお昼にクラシック」のシリーズは、平日の午後に開催する1時間のコンサートです。クラシック音楽にはあまり馴染みの無い方々でも気軽にお楽しみいただける親しみやすいプログラムと破格の料金!一方で、クラシック音楽を深く愛する方々にもご満足いただけるとびきりの演奏 この両方を兼ね備えることで、ご好評をいただいております。

今回は、「魅惑の木管アンサンブル」というタイトルで、フルート、オーボエ、クラリネット、ピアノという編成でお贈りいたします。当館専属の水戸室内管弦楽団(MCO)のメンバーで、ランパルの愛弟子であり、わが国にとどまらず国際舞台で活躍し、今日のフルート奏者を代表する1人である工藤重典さんが登場します。さらに、工藤さんがその実力を認める3人の新進気鋭の演奏家たちが出演します。オーボエの荒絵理子さんは、MCOの演奏会にもたびたびゲスト出演しているのご存知の方もいらっしゃるかもしれません。彼女は、MCOのメンバーである宮本文昭さんの一番弟子です。宮本さんがこれまでに後進の指導に努めてきたなかで、最も大きな成果は荒さんの存在に他ならないと語るほどの才能と実力の持ち主です。クラリネットの伊藤圭さんは、当館

専属のATMアンサンブルの第18回演奏会(2004年)で、原田幸一郎さん指揮により行われた「ブルックナー:交響曲 第7番」の室内アンサンブル版の演奏に参加しており、また、小澤征爾オペラプロジェクトでも鍛錬を積んでいる俊英です。そして、ピアノの成田有花さんは、ソロ演奏に加え、伴奏ピアニストとしても数多くの演奏家たちから信頼を集めており、今回も独奏と伴奏の両方で大活躍してくれます。

プログラムは、各楽器の独奏曲から出演者全員による木管アンサンブル作品まで、多彩な編成でお届けします。まずはフルート、オーボエ、ピアノという編成で、工藤さんは「独特の哀愁が魅力的な作品」と語る、ヴィヴァルディの協奏曲 RV103の第1楽章でコンサートの幕が明きます。続いて、荒さんのオーボエ独奏で、名人芸を要する華麗なカリヴォダのオーボエのためのサロン小品 作品228。クラリネットの伊藤さんは、ハーマンのクラリネット・オン・ザ・タウン という楽しい曲を披露してくれます。成田さんのピアノ独奏では、色彩豊かで陰影に富んだラヴェルの水の戯れが演奏されます。そして工藤さんのフルート独奏コーナー!1曲目は、この作品の存在がどれほど多くのフルート・ファンを生み出したか分からないという

名曲、ピゼーのアルルの女 第2組曲からの「メヌエット」。続いて、工藤さんの超絶技巧が発揮される難曲、ジュナンのヴェニスの謝肉祭が演奏されます。こうして、それぞれの楽器の魅力を存分にご堪能いただいた後に、これらの楽器が奇蹟のように融合するアンサンブル作品、サン＝サーンスのフルート、オーボエ、クラリネット、ピアノのためのカプリス 作品79を心行くまでお楽しみいただけます。工藤さんの軽快なトークもご期待ください!

1ドリンク付きで1,200円!! 託児サービスもご用意しておりますので、小さなお子様も、なかなかコンサートに行けないというお母様もどうぞお越しください。さらに、館内レストラン「ヴェールブランシェ」のご協力で、チケットをお持ちの方は2月1日から28日まで、同レストランのランチもしくはディナーに10%の割引価格でご優待します。是非、こちらもご利用ください。《中村》

*託児サービスをご希望の方は、1月26日(金)までに水戸芸術館音楽部門・担当:中村、中崎宛てにお電話ください(TEL:029-227-8118)。定員20名・料金500円 定員になり次第、締切らせていただきます。お申し込みはお早めどうぞ!!

写真左から、ジグモンド・サットマリー、
アニコ・カタリーナ・サットマリー、
1997年の公演から



巨匠サットマリーが、オルガンの現在、そして未来を照射します。

2 / 26(月)ジグモンド・サットマリー オルガン・リサイタル

現代に生きるオルガン

パイプ・オルガンの最大の魅力は、多彩な音色と他の伝統楽器では決して実現できない大音響にあると思います。しかし、今日では、電子工学などの発達により、シンセサイザーに代表されるように、音を人工的に合成することが可能となり、私達は電子音の世界で無限の音色を手に入れることができるようになりました。一方、大音響については、ポピュラー・ミュージックの分野などで、アンプリファイ(電氣的な音の増幅)された音響が世の中を席卷していることは周知の通りです。このような現在の状況を見渡すと、パイプ・オルガンという楽器は、すでに歴史的な存在へと押しやられてしまったかのような印象をもてしまいます。

しかし、21世紀に生きる私達は、この新しく生まれた電子音楽の世界には、自身の夢を無邪気に託すことができないことを知っています。20世紀の多くの思想家たちが指摘するように、仮想現実的な世界に入り込んでしまうと、私達の「生」は希薄化してしまいます。これまでの人類のあらゆる活動は、さらなる発展を目指して為されてきたのですが、これからは「身の丈を知る」、「足を知る」というような価値観の転換を図るべきではと考えます。話しが広がり過ぎてしまいましたが、今日人類が抱える自然破壊の問題などを考えても、こうした発展ばかりが価値ではないという発想が、これからは重要になってくるのではないかと思います。

さて、パイプ・オルガンに話を戻しましょう。金属や樹木など自然物から産み出されたパイプに、風が通り抜けることで音が鳴る、古来より人々への畏敬とともに親しんできた楽器。ヴァーチャルな電子音とは対照的な、自然の息吹を代弁するパイプ・オルガンこそ、進化論から発想を転換させた上記のような視点で眺めると、「古くて新しい」楽器であると言えるのではないのでしょうか。

現代の巨匠・サットマリー

ハンガリー生まれの巨匠、ジグモンド・サットマリーは、バッハやリストなどの演奏で高い評価を得ており、オルガンの伝統に深く根ざす一方で、この楽器の現代的な魅力や楽しみを提示し、さらにその未来を切り拓こうとしています。疾風のごとくパイプを鳴らし、鮮烈な色彩の大伽藍を表出させる…。同時代精神を意識した彼のオルガン演奏

は、世界中から熱い支持を受けており、事実、サットマリーは、世界各地からリサイタルを熱望される数少ないオルガニストの1人なのです。水戸芸術館には1997年3月のリサイタル以来、10年振りの再登場となります

今回、サットマリーが水戸公演のために用意したプログラムは、これまでの長いキャリアを通して彼が大切に育んできた、そして今日心より演奏したいと思う曲ばかりが集められていると考えられます。

伝統への眼差し

オルガンの伝統への眼差しとして、サットマリーはラインケン、バッハ、フランク作品という3つの歴史的な作品を選びました。演奏会の最初に取り上げられるのは、北ドイツ・オルガン楽派の集大成とも言える作品を残したラインケンの音楽です。若き日のバッハは、このラインケンのオルガン演奏を聴くためにハンブルクまで旅行をし、後にフーガ(BWV542)を書くことによって、ラインケンの音楽技法に敬意を表したと言われています。続いて演奏されるのは、バッハの「前奏曲とフーガ 変ホ長調 BWV552」。オルガン音楽の金字塔を打ち建てたバッハ作品のなかでもとりわけ崇高な表現に溢れた傑作と賞されている作品です。そして、バッハ以降、再びオルガン音楽の大輪の花が咲いたのが、近代フランス音楽においてです。今回取り上げられるフランクは、華麗なフランス・オルガン音楽の黄金時代とも呼べそうな大きな潮流の礎を築いた作曲家です。今回演奏される「コラール 第3番」は、フランクの最後の作品で、今日でも多くの人の心を魅了している優美な名作です。

故郷ハンガリーの音楽

サットマリーが生まれ育ったハンガリーは、前世紀まで大きな動乱をくり抜けてきました。1867年、オーストリア皇帝がハンガリー国王を兼任するオーストリア・ハンガリー二重帝国が成立しましたが、第1次世界大戦後、敗戦によりハプスブルク王朝は廃され、帝国の領土は分割され、トランシルヴァニアやスロヴァキアなど、かつてのハンガリーの領土の大半は失われました。第2次大戦後、ハンガリーは共和国となり、1949年以降社会主義国家となったのですが、89年から再び共和国となって現在に至ります。数々の抑圧のなかで、ハンガリーの人々は自身の民族的なアイデンティテ

ィーを模索しました。今回取り上げられるコダーイは、バルトークなどと共に20世紀初頭に、ハンガリーの村々にほとんど昔と変わらない形で残っていた農民の民謡などを収集し、自らの音楽創作の源泉とした作曲家です。サットマリーによるコダーイの演奏には、自身の根源を見つめると同時に、愛する故郷への想いというものが籠められているのです。

未来に向かって

サットマリーは、オルガン演奏家であると同時に作曲家としても活動を行っており、優れた作品を多数、世に残しています。ラインケン、バッハ、フランクにも当てはまるのですが、優れたオルガン音楽を書き残した作曲家は、そのほとんどが優れたオルガン演奏家でもありました。オルガンを熟知した名演奏家が、新しいオルガン音楽を作り出すというこの方程式を、現代のサットマリーにも当てはめたいと思います。新時代のオルガンの可能性を追求するサットマリーの自作自演をどうぞお楽しみください。

さらに、サットマリーはオルガンの新しい可能性を開拓すべく、ドヴォルザークの交響曲第9番「新世界より」のオルガン編曲とその演奏を手掛けています。大オーケストラによって成し遂げられるシンフォニーの世界を、いかにオルガンで表現していくのか?「楽器の王様」オルガンを駆使しての壮大な実験に、是非お立会いください。

今回のリサイタルの大きな特徴のひとつに、愛娘アニコ・カタリーナ・サットマリーとの共演が挙げられます。彼女は、ライナー・クスマウル、ハンスハインツ・シュネーベルガー、デイヴィッド・タケ人、サシュコ・ガヴリロフ等に学び、ドイツの名門オーケストラであるラインランド＝プファルツ州立フィルハーモニー管弦楽団にも所属する、国際的に活躍するヴァイオリニストです。音楽家として、また父として、音楽とそこに宿る魂を、愛娘と共有する幸福な瞬間が、水戸の演奏会で実現されます。受け継がれる魂の奇蹟を、私達は祝福とともに迎え入れられたらと思っています。

聖なる楽器の現在、そして未来を探しに、サットマリーのリサイタルに是非ご来場ください。

《中村》



写真左から;林 光、中村真由美・佳代

林 光氏の指導で、合唱の愉しさを心から味わう 3 / 18(日)合唱セミナー 2007 講師:林 光

茨城県合唱連盟、茨城県高等学校教育研究会音楽部との共催により毎年実施している「合唱セミナー」。畑中良輔氏、池辺晋一郎氏、新実徳英氏、桑原妙子氏、栗山文昭氏など日本を代表する作曲家、指揮者、合唱指導者を講師に迎え、課題曲を半日かけて練習するという催しです。どこかの団体に所属していなくても、合唱を愛する方ならばどなたでも参加できるセミナーですので、ぜひ会場に足をお運びください。

作曲家の林光氏が講師に

今回は、作曲家の林光氏を講師にお招きしました。日本を代表する作曲家の一人であり、器楽曲や室内楽曲のほか、とりわけオペラや歌曲、合唱曲などを通じて、「日本語をどう音楽の上に乗せるか」という問題に積極的に関わってきた作曲家でもあります。

日本語とのかかわりの中で、特に重要な仕事に挙げられるのが、オペラシアター「こんにゃく座」での活動です。林光氏は、1975年から「こんにゃく座」の芸術監督兼座付き作曲家として、セロ弾

きのゴージュをはじめ、森は生きている、白墨の輪、吾輩は猫であるなど、たくさんの日本語のオペラを作曲してきました。昨年11月に水戸芸術館友の会主催によりACM劇場で開催された林光氏、竹田恵子氏(ソプラノ)、大石哲史(バリトン)によるオペラ・レクチャー・コンサート「吾輩はオペラである」で、その創作の秘密を知った方も多いでしょう。林光氏は、セリフの音読を重ねるうち、自然とその抑揚をとらえ、いとも簡単に音楽をつけてしまうのです(少なくとも客席でお聴きになられていた方は同感していただけるのではないのでしょうか)。

日本語の歌詞をいかに西洋の技法で作曲された音楽に組み合わせるか、という問題は、山田耕筰に始まって現代にいたるまで、たいへん難しい課題であり、多くの日本人作曲家の頭を悩ませてきました。林光氏は、この問題を頭で考えるのではなく、セリフの音読を繰り返し、必要とあらば身振り手振りも加えていく。つまりこの問題に身体的・生理的な方向からぶつかっていくことで、ひとつの有効な解決法を見出したと言っても良さそ

うです。「こんにゃく座」の歌手の皆さんが実に巧みに歌うのも事実ですが、その源である林光氏の書いた音楽そのものが、日本語の発音や抑揚にぴたり寄り添っていることを忘れてはならないでしょう。

一緒に歌って学びましょう

日本語を歌うことの難しさについては、普段合唱活動をされている方々も痛感していることと思います。このセミナーでは、林光氏自作の3曲(メリーはこひつじがっていた、花の歌、もしも恋の悲しみが)を練習しますので、経験豊かな林光氏から貴重な指導やアドバイスを受けられるのではないのでしょうか。合唱を愛する皆さん、どうぞふるってご参加ください。

楽譜は、チケットをお求めになる際にお渡しします。セミナー当日は、音取り練習はいたしませんので、お早めにお求めいただき、各自事前に譜読みを行ってきてください。ご参加をお待ちしています。

《関根》

SELF

あの 木星 も聴ける! 水戸市在住の中村真由美・中村佳代ピアノ・デュオが魅せる2台ピアノの世界。

3 / 17(土) 中村真由美・中村佳代 ピアノ・デュオ・リサイタル

前回のリサイタルでは、私たちが芸術館のステージで演奏したいと思い続けてきた曲を中心にプログラムを組みましたが、会場へ足を運んでくださった方々には、初めて耳にする曲が多かったように思います。実際アンケート等で、アンコールで演奏した、最近特に人気の 木星(ホルスト作曲の惑星より)がよかったという声をいくつか耳にし、次回演奏会を開く機会がある時には、プログラムを目にした方々に、「この曲知ってる」「何か面白そう」と感じていただける選曲を考えてみたいと強く思いました。という訳で、今回は2台ピアノ

でもポピュラーな曲を中心にプログラムを構成してみました。

前半では、ソナチネアルバムでもおなじみのクレメンティの簡潔で明快なソナタ、それからフランスのミヨー、タイユフェール、オーベールの作品を取り上げました。ミヨーのスカラムーシュは、2台ピアノのための全作品の中でも特に親しまれている名曲です。第3楽章は、ミヨーがブラジルに滞在した際に影響を受けた、サンバのリズムを取り入れた快活でとても陽気な曲です。タイユフェール、オーベールの作品は初めて聴く方が多いかと思いますが、フランスのエスプリのきいたしゃれた作品です。タイユフェールは、ミヨーと同じフランス6人組のメンバーの女流作曲家であり、野外遊戯は遊びをテーマとした2曲からなる小品です。フォーレの弟子であるオーベールの小組曲は、透明感のある美しいハーモニーの3曲からなる組曲で、私達のお気に入りの曲でもあります。

後半では、オーケストラでもおなじみのラプソディー・イン・ブルーと、惑星より 火星・金星・

水星・木星を演奏します。これらの曲は、私が中学時代に出会った曲で、特に惑星は夜寝る時に子守唄(?)として聴いていました。中でも、木星の出だしのホルンのソロが大好きで、五線譜に書き取り、当時所属していた吹奏楽クラブの男子生徒に吹いてもらっていたのを思い出します。(ちなみに私も妹もパートは打楽器でした。)長年オーケストラ作品として親しんできた曲を、2台ピアノで演奏できる喜びは格別です。この後半のステージでは、2台ピアノの新たな可能性を追求したいという思いもあり、打楽器を交えた編成としました。打楽器奏者には、弟の中村文彦(姉の頼みは断れない?)に加え、弟の演奏仲間である曽我彰さん、鎌形修美さんにも共演していただき、更に音の広がりのある、迫力あるステージをお届けしたいと思います。

それでは、当日コンサートホールで皆様とお会いできることを楽しみにしております。

中村真由美



後藤晴美

SELF

PORTRAIT

水戸を拠点に精力的に活動を行っている後藤晴美のリサイタル。師・植村泰一がゲスト出演し、オリジナル楽器の演奏も披露されます。

3 / 24(土) 後藤晴美 フルート・リサイタル

先輩である元東京交響楽団の首席フルーティストのM氏に、彼のプロデュースしたフルートダモーレ(バロック時代に短い間存在したが、何故か消えてしまった楽器を復元した。いくつかのフルートメーカーが試みているが、未だ定着していない。名前のダモーレは甘く優しい音がする特徴から)という楽器を半ば無理矢理持たされた日から、この楽器の使い道に煩悶する日々が続いた。はじめは編曲作品から、そしてもうひとつのフルートの音色として、従来のフルート作品を違った形で再現する事に取り組んだが、この楽器の為のオリジ

ナル作品の必要を強く感じた。思い切って近衛秀健先生に委嘱し、出来上がったのが二人が会う時である。初演は2002年、水戸の常陽藝文センター、相手は私にフルートダモーレを押し付けた張本人のM氏。その日には近衛先生も、我が敬愛する植村泰一先生(以後、師匠と表記する)も来水し、打ち上げには北茨城に案内し鮫鱈鍋をつついた事は忘れられない...。という経緯で生まれた二人が会う時で音楽会の幕を開ける。今回の相手は師匠。出会ったのは音楽大学に入学した春。その時には既に、傍で聴く音はなんだかしゃばしゃばしているのに(先生ごめんなさい)NHKホールが一番後ろまで音が通るという伝説があった。それから20数年。師匠は銘器と出会う。1870年(頃)製の初代の手による「ルイ・ロット」である。この楽器を手にした師匠はまるで金棒を持った鬼、無敵である。ぜひその響きをお楽しみいただきたい。そして、この水戸芸術館といえば武満徹氏と馴染みが深く、作品の初演もされた。その武満氏の遺作となったエアは世界的

フルーティストであるオーレル・ニコレ氏の70歳の誕生日に贈られ、初演したのが日本人の初めての門下生の師匠である。そのエアは音域的にルイ・ロットでは不可能なので、師匠がどんな金棒を使うか目下は秘密にしておきたい。他のプログラムはアンメルのソナタを1910年製の木管のフルートで、バッハのバルティータをダモーレで演奏する予定。珍しい所は、ケクランのリリアンのアルバム。『会議は踊る』で有名なイギリスの女優リリアン・ハーヴェイをイメージした作品。音楽学者として和声法、対位法の著書を残したケクランは、意外にも映画好きだったらしい。この曲はピアノのハーモニーで特有の不思議な世界が構成され、ピアニストの小林由佳氏の腕の見せ所となる。また、ほんの僅かだけピッコロも登場し、色を添える。最後には三つ巴でダマーズ。フランス人の作曲家で軽妙洒落な作風だがしたたかな難曲。はてさてどんなことになるのやら...

後藤晴美



最近の公演から DECEMBER



1



2



3

水戸室内管弦楽団第67回定期演奏会
(12月7日、8日、9日)

小澤征爾音楽顧問が指揮するMCO定期演奏会がいつも熱気に包まれていることはあらためて書くまでもないが、それにしても第67回定期演奏会へのお客様の期待の高さは、特別なものがあつた。もちろん、この演奏会が、今年前半過労で休養をとった小澤征爾音楽顧問の復帰第一弾だからである。また、この演奏会が、宮本文昭、そしてラインハルト・ホルヒのMCOオーボエ奏者としての最後のステージであることも、特記すべきだろう。

そのような高揚感の中、小澤音楽顧問は、いつもと同じように水戸芸術館に現れ、プランクをまるで感じさせることなく、MCOの仲間たちと、信頼の絆で結ばれた音楽作りを開始した。今回のプログラムは、モーツァルトの生誕250年を締めくくるにふさわしい内容。まずモーツァルトのピアノ協奏曲第23番、そしてこの曲の第2楽章に

インスパイアされた細川俊夫の新作「月夜の蓮」の日本初演(以上2曲の独奏は児玉桃)そしてふたたびモーツァルトの、交響曲第41番「ジュピター」。小澤音楽顧問とたびたび共演している児玉桃は、初共演のMCOともみごとな親和性をみせる。「月夜の蓮」では作曲者の細川俊夫が初日からリハーサルに立会い、新しい世界が演奏者たちによって創造されてゆく様を見守っている。それが3日間の演奏会において、どのように開花したかは、以下のアンケートをご覧ください。また、12月5日、6日には、コンサートホールで計4回にわけて、水戸市内の小学5年生を対象にした「学生のための公開リハーサル」を実施。34校、約2,500人が来場してMCOの音楽作りを耳を傾けた。また12月7日には、演奏会と平行し、NHK水戸放送局の協力を得て茨城県武道館で無料の大スクリーン・コンサートを実施。こちらも1,500人の方々が来場され、楽しまれた。《矢澤》アンケートから 小澤さん

1~3. 水戸室内管弦楽団第67回定期演奏会

最近の公演から DECEMBER



1



2



3



4



5



6



7

1～2.アートタワーみと スターライトファンタジー
3～4.水戸の街に響け! 300人の《第九》
5～7.クリスマス・プレゼント・コンサート

にまた会えて良かった!(無記名の方) 今年をしめくる最高の演奏でした。ありがとう。小澤さん。そして、楽団のみなさま(下妻市:K.F.さん) コンチェルト23、どうしてこんなに心にしみる演奏ができるのだろうかとおどろいた(鉾田市:A.O.さん) 細川氏の新作は静寂にはじまり静寂に終わる東洋の郷愁に満ちた力作だと思います。日本初演に立ち会え幸運でした(水戸市:T.M.さん) もしミケランジェロがゼウス神(ジュピター)を彫ったなら、今夜の小澤+MCOの41番の演奏のように、壮大な宇宙を表現したのではないかと思います(水戸市:S.E.さん) 初めて一緒にした友人から、毎年をはるばる出かける気持ちがよくわかると云われました(静岡市:K.S.さん) 宮本さん、さようなら、感動的なフィナーレでした。初めてブラボーと叫んでしまった...(北海道恵庭市:J.I.さん)

アートタワーみとスターライトファンタジー 第11回 クリスマス・コンサート

[市内小中学校 芸術館コンサート]

(12月2日)

水戸芸術館や水戸駅をライトアップする水戸の冬の風物詩が、アートタワーみとスターライトファンタジー。同イベントの一環として、水戸市内の小・中学生が日頃の音楽活動の成果を披露するのが「クリスマス・コンサート[市内小中学校芸術館コンサート]」です。今年も吹奏楽、金管合奏、合唱、ミュージックベルなど17校、21団体、700人を超える生徒さんが参加しました。ゲスト出演のビックバンド「ソウルフル・ユニティ」も大いにステージを盛り上げてくれました。《中村》

水戸の街に響け! 300人の《第九》

(12月17日)

今年で6回目を迎え、すっかり水戸の年末の風物詩として定着した感のある300人の《第九》。コーラスは、未経験者を含む一般公募221名と茨城県合唱連盟125名の総勢346名が参加。9月から指揮者の鈴木良朝氏を中心とする指導陣による練習を重ね、本番に臨みました。

今年の心配は何といっても天気でした。予報では雨マークも出ていたのですが、何とかもってくれました。特に2回目の本番(13:30開演)流れ行く雲の隙間から柔らかな陽が差し込んできたときは、実に感動的でした。もちろん、コーラスの皆さんの、練習成果を見事に発揮した熱演あつての感動です。器楽奏者(小林由佳、佐々木果奈、中村真由美、中村佳代、尾花章子)と独唱者(結城滋子、山本彩子、布施雅也、

清水良一)の息のあったアンサンブルと力強い歌声も、合唱をしっかり支え、かつ演奏に華を添えました。最後は、のべ2500人の観客の皆様と「歓喜の歌」を唱和。水戸の文化的精神的象徴とも言うべきあのタワーの麓から水戸の街に響いた《第九》が、あいかわらず暗い事件や争いごとの絶えないこの世界に希望の灯を点すように、と祈らずにはいられません。《関根》

クリスマス・プレゼント・コンサート2006

(12月23日)

全7ステージでお贈りした今回のクリスマス・コンサート。ソプラノ歌手・小泉恵子さんは、モーツァルトの宗教曲アリア、シューベルトの歌曲、そしてオペラ・アリアなど多彩な作品を見事に歌い切ってくれました。弘中孝さんと山口泉恵さんの師弟コンビによる2台ピアノは、互いの音楽性を尊重しながらも本当に息の合ったもので、本年10月に芸術館で開催予定の演奏会が待ち遠しく感じられるものでした。原曲である歌曲とその旋律を用いたヴァイオリン曲が交互に演奏されるステージで華麗な競演をしたのが、小泉恵子さん、谷池重紬子さんのペアと久保陽子さん、弘中孝さんのペア。ピアニストの中村佳代さんは20世紀音楽の巨匠メシアンの「幼子イエスに注ぐ20のまなざし」を同コンサートで5年に渡り披露してくれています。今回はその最終回として、終曲「愛の教会のまなざし」が演奏されました。続くオペラ・アリアのステージでは、小泉さんと共に、新進のテノール歌手・倉石真さんが熱演しました。最後に登場したのは、茨城の名門合唱団・あひる会。鈴木良朝さんの指揮で、得意のグレーロやヴィヴァルディ作品などが演奏されました。終演後は、恒例のエントランスホールでのクリスマス・キャロルの大合唱、オルガン伴奏は齊藤健介さん。このコンサートの企画・進行役はお馴染みの畑中良輔氏。《中村》アンケートから

いつもバラエティーに富み、みごとな企画内容でした。(水戸市:Y.T.さん) (中村佳代さんの)メシアンのピアノ曲が一番クリスマスにふさわしい演奏だと思いました。神の啓示のような光のイメージ、慈愛に満ちた響き、鳥の声など...いろいろな音が聴こえてきました。倉石さんのテノールのアリアもよかったです。(水戸市:S.E.さん) アヴェ・マリアのお2組(小泉、谷池/久保、弘中)の演奏に感動!涙が止まりませんでした。(無記名の方) 弘中さん、山口さんの2台ピアノの素晴らしい共演は見事でした。今年最後のコンサート、素晴らしい内容でした。(無記名の方)

【プチ情報】 今年も水戸市国際交流センターにて、学芸員3人のリレーによるトーク・シリーズ「クラシック音楽でめぐるヨーロッパの街」Vol.3がごさいます。2/7(水)、21(水)、3/7(水)、14(水)の計4回。先着60名、要申込です。お問い合わせは水戸市国際交流協会(TEL.029-221-1800)まで。水戸内原中央公民館でも「いきいき出前講座」の一環として、学芸員によるモーツァルトをテーマにした2回のトークを、2/21(水)、28(水)に行います。お問い合わせは水戸内原中央公民館(TEL.029-259-4044)まで。

